

||||||| 記 事 |||||||

消 息

## オレゴン大学におけるワークショップ “曲直瀬道三——古医書の漢文を読む”の開催

町 泉寿郎

二松学舎大学21世紀COEプログラム“日本漢文学研究の世界的拠点の構築”(平成16~20年度)では、漢字・漢文が日本語史および日本学術史の中で果たしてきた役割を検証することをプログラムの目標として掲げ、研究対象を狭義の文学に止まらず、歴史・思想・宗教・芸術・自然科学等の広範な分野に亘る漢文体著述を対象とし、またそれを国内外に普及啓蒙するためのさまざまな取り組みを行ってきた。

医学文献に関しても、毎年の公開講座において、本会会員の小曾戸洋氏・真柳誠氏・遠藤次郎氏を講師に迎えて日中の伝統医学の歴史と文献に関する講座を開催し、また主に近世近代漢文班において資料調査やデータ収集を継続してきた。

一方、国外に目を転ずれば、‘日本漢文’というおよそ流行とは縁遠く思われる分野において、2008年中にヴェネチア大学・南カリフォルニア大学・ストックホルム王立工科大学において中古・中世の漢文を対象としたワークショップが開催されたほか、2月にはロンドン・ウェルカムインスティテュートにおいて日本古医書を対象としたワークショップが開かれており(講師はケンブリッジ大学のピーター・コーニツキー教授)、近年の日本学研究の多様化・専門化の動向が看取される。

こうしたなか、8月25日から29日の5日間に亘って、二松学舎大学21世紀COEプログラムとオレゴン大学アジア太平洋研究所の共催によって、曲直瀬道三を対象としたワークショップを開催したので、ここにその概要を報告する。

本会会員でもあるアンドリュー・ゴープル准教

授の全面的な協力によって、オレゴン大学歴史学部のあるMackenzie Hallにおいて会議は以下の日程で進行した。

9/25(月)

① 9:30~11:30 “曲直瀬玄朔(二代目道三)著『医学天正記』の歴史的背景：織豊期~近世初期古記録に現れた病歴とカルテについて”

アンドリュー・ゴープル(オレゴン大学)

② 13:30~15:30 “曲直瀬道三著『啓迪集』の老人門における老いと長寿に関して”

エドワード・ドロット(ダートマス大学)

9/26(火)

③ 9:30~11:30 “曲直瀬道三著『黄素妙論』にみる房中養生について”

町 泉寿郎(二松学舎大学)

④ 13:30~15:30 “医書出版のはじまりと曲直瀬流医学”

小曾戸 洋(北里大学)

9/27(水)

⑤ 9:30~11:30 “日本医家の肖像画について—曲直瀬流ほか—”

町 泉寿郎(二松学舎大学)

⑥ 13:00~15:00 “曲直瀬道三説話について”

福田 安典(愛媛大学)

⑦ 15:30~17:00 “曲直瀬道三時代の芸術と文化の一側面：茶道と香道を考える”

池田よう子(伊達家伯記念会)

9/28(木)

⑧ 9:30~11:30 “曲直瀬道三自筆資料の解説”

町 泉寿郎(二松学舎大学)

⑨ 13:30~15:30 “古記録の医療記事の解説—

『医学天正記』を中心に”

福田 安典(愛媛大学)

9/29(金)

⑩ 9:30～11:30 総括討論

以上の報告者以外に、ジェイソン・ウェッブ准教授(東京大学東洋文化研究所)が全日程に参加し、討議の活発化に重要な役割を果たした。主な参加者が日本学の研究者であったため、使用言語は主に日本語で行われ、時に英語による通訳で参会者の理解を助けた。

次に、各報告の概要をあげる。

- ① ゴーブル報告は、曲直瀬道三・玄朔とほぼ同時代の山科言継・言経の日記に見られる医療記録の検討をとおして、もともと曲直瀬玄朔の診療日記であったと考えられる古記録から、医案『医学天正記』という独立した著述が成立する過程についての考察を行った。
- ② ドロット報告は、曲直瀬道三が『啓迪集』において老人門を独立させたことに着目し、従来の‘養生’が権力者に対する健康管理の提案であったものから、子が老いた親の健康管理を行うためという著述目的の変化を指摘して、そこに近世的な庶民の台頭と孝養を重んずる儒教への転換を見る。
- ③ 町報告は、房中養生書『黄素妙論』について、道三の著作であることを証する資料として『当流医之源委』をあげ、房中書の歴史を概観しつつ『黄素妙論』が典拠とした明・嘉靖刊『素女妙論』について紹介し、『黄素妙論』の著者を道三とすれば、道三の明刊医書の高い吸収力の証左といえるとする。
- ④ 小曾戸報告は、医書出版萌芽期の状況や入明した僧侶・医師の存在を道三以前の状況としてあげ、それをうけた道三『啓迪集』には嘉靖以前の明刊医書からの引用が多数みられることを指摘し、続く玄朔の時代には古活字版医書が数多く出版されて整版本の時代に移行

するとして、印刷文化の面から16～17世紀の日本の医学状況を幅広くとらえた。

- ⑤ 町報告は、『杏雨所蔵医家肖像集』に収められた絵画資料と『今大路家記』等の記録を主な材料として、服飾と制度のかかわりの視点から江戸期を中心とした日本医家の風俗を考察した。
- ⑥ 福田報告は、日本近世文学研究の立場から、従来の医学史研究では殆ど取り上げられることがなかった『戯言養記集』『醒睡笑』『信長記』等に収められた道三・玄朔の講釈や診脈等に関する数々の説話を取り上げて、道三・玄朔の事績の中から同時代人の印象に残ったものをとおして、近世の医療文化における曲直瀬道三の意義を考察した。
- ⑦ 池田報告は、道三が従来知られている茶人としての側面以外に、名香「蘭奢待」を所持し、建部隆勝と親交をもった香人であったことを紹介して、諸芸に通じた16世紀文化人としての道三の一面を指摘した。
- ⑧ 町報告は、道三の漢文資料をどのように訓読するかを検討する実例として、道三自筆にかかる道三肖像画賛を玄朔の訓点資料に従って訓読し、また『啓迪集』策彦周良題辞を道三自筆本に従って訓読した。
- ⑨ 福田報告は、『医学天正記』から玄朔が法眼に任ぜられた天正10年の陽光院霍乱を治療した記事を取り上げ、本復祝いの演能番付まで記していることを紹介し、同書の記録性に関する問題点を考察した。

以上の4日間に亘る報告とそれに対する参加者の活発な討論によって、曲直瀬道三・玄朔をとおして16～17世紀における日本医学史の諸問題に関する共通理解が深まった。そこで、ワークショップ報告者・参加者を中心に報告書を作成して、本ワークショップの成果を公開することとした。